佐和田敬司著

『現代演劇と文化の混淆』

早稲田大学出版部　二〇〇六年

小野正和

演劇という表象を通してある時代のある地域のある文化を特化し、理解しようとする作業がいかに道のりの長い、大きな仕事であるかをこの著作はよく教えてくれる。過去へのパースペクティブがどうしても欠かせない現代演劇、とりわけ、日本では主に翻訳によって紹介・上演される異文化の演劇、なかでも、著者が日本の文化と演劇風土の中でそれらの意義を明かそうと取り組んでいるオーストラリア演劇・アボリジニ演劇となると、その作業にはそれ相応の研究と洞察が要求される。十五年の歳月がこの著書にかけられていると著者が語っているのもなるほどと頷けるところがある。

内容を少し紹介すると、この本は四つの章から構成されていて、第一章（翻訳劇の誕生と変容）は、翻訳劇がかかえている差異の問題、（もとよりそこではカルチャーの差異がその根底をなすわけだが）、を抉りながら、六〇年代から現在までの日本の現代演劇の推移を翻訳劇を中心に俯瞰したもの。もっとも、俯瞰とはいえ主要な上演作品を当時の劇評を交えて丁寧に論述しているので、年寄りのぼくなぞは六〇年の『ゴドーを待ちながら』の舞台やジャンジャンで見たシェイクスピア劇などを彷彿し、しばし懐旧の思いに浸ることもできる一章である。シェイクスピア劇といえば、ここには福田恒存訳と小田島雄志訳の対比にも触れていた。翻訳がかかえる差異の問題はそれ自体大きなテーマで、簡単に結論が出せないのはその通りであろう。著者も実体験をふまえて説いているが、ぼくのわずかな経験でも、舞台化された翻訳が演出家・演技者とのコラボレイションになることは否めないようだ。なお、この翻訳と翻訳劇の問題は第四章（アボリジニ演劇と翻訳劇の出会い）、結論（翻訳

劇とインターカルチュラリズム）でさらに敷衍されている。

文学に携わる人間にとって、どういう作品とめぐり会ったかは、どういう世界を初めに表現したかと同じくらいに重きをなす事柄であろう。第二章（オーストラリア戯曲の日本上演）、第三章（「先住民・マイノリティ」の表象と演劇）は、著者がオーストラリア演劇・アボリジア演劇の分野で日本の研究者・演劇人を先導する位置に立っていることをあらためて印象づけるエッセイである。それらの演劇の歴史的コンテキストについてはこの本を一読してもらうしかないが、『フローティング・ワールド』（ジョン・ロメリル作・一九七四年初演、日本では著者の翻訳で一九九五年初演）をはじめ、『オナー』（ジョアンナ・マレースミス作・一九九五年初演）などのオーストラリア演劇、『ストールン』などのアボリジニ演劇との出会いが著者のそれからの研究活動にひとつの方向を与えたことはこれらの章の端々から十分読み取れる。今次の大戦における日本の戦争責任を衝いた戯曲『フローティング・ワールド』は、現在のまさに「アジアの海を浮遊する」日本と重ね合わせてみると、すぐれて今日的な意味合いを帯びてくる作品である。

異文化を受容するという時、その主体性はどこにあるのか、どこにあるべきなのか。自分の言葉に置き換えるという言い方が一つ可能だとして、その自分をどこに置けばよいのか。ハイブリッドの文化に曝されている現在、この著者がオーストラリア・アボリジニの演劇を軸に提起した問題は根深くて重い。日本におけるマイノリティ文化の行方をはじめ著者が指向する〈ヘゲモニー関係のない文化の混淆〉を本格的に論考していくにはさらなる時間とエネルギーが求められることになるだろう。日本の現代演劇がどういう展望をこれから拓いていくのか、それも未知数である。この力感に欠けることのない著書が次の著書を生むステップになることを心から願ってやまない。

＊　＊　＊

澤田敬司先生のこの著書は先頃先生が取得された博士

資格の学位論文を柱に加筆、再構成して上梓したものだと後書きにある。研究の細部にわたって理解するには専門的な知識が少なからず必要なところもあるが、一般の演劇愛好家にも奨められる書物である。巻末のオーストラリア演劇年表・日本語の文献リストも参考になる。